

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.24 子ノ権現（天龍寺）の仁王像

前回に引き続いて本稿でも、花井探嶺（はない・たんれい、1879—1954）の作品を取り上げよう。通称「子ノ権現」（ねのごんげん）の名でなじみ深い天龍寺（埼玉県飯能市、天台宗）は、標高640mの山頂に位置し、足腰守護にご利益がある寺院として古くから篤い信仰を集めてきた。その山門に聳え立つ巨大な仁王像が本稿の主人公だ（図1）。仁王像は参道の両脇に置かれ、寺院内への仏敵の侵入を防御すべく、憤怒の表情で睨みを利かせている。台座を含めれば像高は6mを超え、近くに寄るとその威圧感がわが身に迫ってくるような強烈な印象を受ける。向かって右側に開口の阿形像、左側に口を結んだ吽形像がそれぞれ位置し、両像とも上半身は裸で筋骨隆々で逞しい。そのモデルは、奈良の東大寺南大門の金剛力士像（運慶・快慶ら作、13世紀）だろう。人間を恐れない鹿でおなじみの奈良公園のあの仏像である。この金剛力士像は小中学校の教科書にも写真入りで登場するので、読者諸氏もご存じのことだろう。

子ノ権現の仁王像のそれぞれの台座の裏面には、「建立費寄附者芳名」の銘板（金属製）が設置され、仁王像の建立に経済的な貢献を果たした寄付者や関係団体の名前が彫り込まれている。阿形像の銘板に刻まれた「東京市大井町 設計兼製作者 花井探嶺」「昭和拾壹年拾壹月拾日 竣工」の刻印から、この仁王像が1936（昭和11）年11月10日に完成したことがわかる。つまり本年（2026年）で、完成から95年を経たことになる。

設計と制作を担当した花井は、とくにセメントを原料とした仏像の制作で名高い。花井は、現在の三重県の菰野町に生まれ、東海地方を拠点に活動したが、1931（昭和6）年ごろの東京市大森区（現在の大田区の一部）に一時的に居住していたという。その時期の作品としては、養玉院如来寺（東京都品川区、天台宗）に複数の作品が残る。子ノ権現の仁王像は、花井の作品としては、おそらく埼玉県内唯一である。

この花井の仁王像は、制作時から注目を集めた。戦前のセメント美術の大成者である矢崎好幸（やざき・よしゆき）は、自著『実技詳解セメント工』（1939年）で本像を写真入りで紹介している（図2）。写真では小学生くらいの男子が仁王像の左足にしがみついている。同著によれば、仁王像は「背丈四・一m、台座二m」を誇り、「鐵金コンクリートにより製作されたもの」と解説されており、本作が鉄筋コンクリート造であることが明示されている。

また表面にも注目したい。同著は「表面はセメントに金属粉を混加した一種の合金仕上げとなつてゐる」と説明する。しかし現在の仁王像の身体にはオレンジ、着衣には青、装身具には赤の塗料がそれぞれ塗布されており、矢崎の解説とは食い違う色彩である。現在の着色

は後世に施されたもので、矢崎が説明するところの「金属粉を混加した一種の合金仕上げ」という制作当初の様子を今は感じることはできない。

矢崎がいう「一種の合金仕上げ」とは、「メタリコン」を指す。メタリコン（metallicon）とは、金属溶射法の一つで、溶けた金属微粒子を高圧ガスで霧状にして、被覆対象に吹き付けてその表面を仕上げる技法を指し、日本では大正時代にあたる1920年代ごろから美術作品における表面仕上げの一技法として導入されはじめた。メタリコンは鍍金（めっき／ときん、英語ではplating）と類似するが、鍍金とは異なる技法である。メタリコンの被覆対象は木材・金属・石材・セメント・紙など、じつに幅広い。たとえ被覆対象が金属でなくとも、見かけ上は金属のように感じられるのだ。塗装が施される前の子ノ権現の仁王像は、おそらく表面上はブロンズ像のように見えたと推測される。

戦前の美術作品におけるメタリコンの応用は一時的なものに終わったため、そもそも作品数が少なく、そのなかでも現存作例はごくわずかである。花井が手がけたこの仁王像は、現在では制作当初のメタリコンの感触を味わえないとはいえ、かつてはメタリコンを施されていた作品として、ここに記録として書き残しておきたい。



図1 阿形像（右）と吽形像



図2 矢崎が自著で紹介した挿図